

## 幕末・維新时期における大坂—江戸間の商品流通史料

——木田家九店文書——

林 玲 子

昭和53年度1年間の関西における研修期間中に接した文書群のなかに、奈良女子大学所蔵の「木田家文書」がある。大坂の紙問屋であった木田家堺屋庄之助は、幕末期には手船廻船も所有しており、明治期にかけて紙問屋仲間＝紙店の行司を勤めた。奈良女子大学所有の同家文書は、大別すると

- (1) 江戸積二十四組問屋の後身にあたる九店重積問屋関係の文書
- (2) 紙積問屋であった木田氏一堺屋庄之助「入叶」家の店舗関係の文書・書状類
- (3) 明治初期の戸長関係史料

の3種である<sup>1)</sup>。本稿は、このうちの(1)九店重積問屋関係の文書の一端を紹介することを目的とする。

九店とは、油・紙・木綿・綿・葉種・砂糖・鉄・蠟・鯨節の9品を扱う問屋仲間をいう。天保12年(1841)12月、幕府は天保改革の一環として問屋仲間の解散を命じ、翌年3月には大坂廿四組江戸積問屋も解散となった。しかし、問屋仲間連合体の重要な機能の一つであった難船処理のためには、何らかの組織が必要不可欠であったことから、弘化3年(1846)に大坂—江戸間の重要流通商品であった9品を扱う問屋仲間が、九店仲間と称する連合体を結成し、残りの仲間は十三店として九店に付属することとなったのである。江戸でもこれに対応した組織が出来、大坂・江戸両地九店の世話番(各店行司が交代で勤める)が連絡して仲間の事務を処理した。

この九店の差配する廻船は、大坂菱垣廻船問屋・大坂樽廻船問屋・西宮樽廻船問屋が仕建元となって商品の積入れ・輸送を行なうが、廿四組時代のように菱垣廻船だけでなく、樽廻船からも荒荷建と称して九店差配下に加わった。その場合は酒荷の積入れは禁止され、難船処理や新造見分などすべて九店世話番の支配下に

おかれた。

九店関係の史料は、『続海事史料叢書』第二巻(日本海事史学会編)にも一部収録されているが、木田家文書中には弘化～明治初年の大坂・江戸(東京)九店世話番間の往復書状類、大坂で積入れに際して作成される手板等、注目すべき史料が多く含まれており、遠からず『続海事史料叢書』第五巻以降に収録されるであろう。全貌はその発刊にまつほかないが、ここではそのなかの慶応2年(1866)12月から明治2年(1869)4月に至る「手板控」を中心に、幕末・維新时期における大坂—江戸間の商品流通状況をみてみたい。

「手板控」は原史料は2冊に別れているが、内容からみて同一文書と推定される。これには各廻船の船名・仕建元・積載商品別の荷数・運賃・本石が記され、仕建月・出帆日・手板日付(三者とも書かれている場合は少ない)が付されている。第1表はこの「手板控」にあげられた198艘の一覧表である。原史料では、1～41番、42～198番と2冊に別れており、この間に脱落があるかも知れないが、あったとしても少ないとみてよいであろう。番号は筆者が付したものであり、原史料の順番によったが、105番のみは原史料では107番の後にあった。月別に整理する必要から順序を変えている。

年月は、前述した仕建月・出帆日・手板日付によって判断した。三者とも必ずしも記されてなく、出帆日と手板日付が月を異にする場合もあり、筆者の考えで整理したので厳密とは言い難い。

船名・仕建元は両者がきちんと記されているとは限らず、たとえば1番は原史料では「順通丸正太郎」のみであり、6番は「大津屋源太郎船」となっている。このため、同史料の前後の記載や他史料を参照してこの項を埋めた。59番、111番、151番、161番、188番は今のところ不明箇所が残っている。なお、仕建元が変わることはほとんどないが、柏屋勘太郎仕建の安全丸慶蔵船が、1度だけ小堀屋新兵衛仕建となっている。慶

1) 牧田りょう子「幕末、維新时期の大坂における紙積問屋——木田庄之助家文書を中心に——」(奈良女子大学文学部『研究年報』第19号)。

第1表 「手板控」による九店差配船

(慶応2年12月～明治2年4月)

番 号	年 月	船 名	仕 建 元	荷 数	伝言物	運 賃	本 石
1	慶 応 2 年 12 月	順通丸正太郎	小堀屋新兵衛	5,602	200	銀貫 匁 (61.427)	2,005
2		九旺丸喜作	西田正十郎	5,334	149	(63.814)	1,931
3		神社丸弥八	柴田正次郎	5,794	107	66.398	1,990
4		神通丸寄七郎	富田屋儀助	5,558	173	51.276	—
5		砂宝丸安治郎	日野屋利右衛門	5,443	55	52.626	1,536
6		住静丸源太郎	大津屋源之助	5,977	167	61.731	2,011
7		神護丸喜十郎	日野屋利右衛門	5,443	130	63.488	1,779
8		寿光丸市太郎	小堀屋新兵衛	5,284	128	55.085	1,902
9		神通丸覚之助	毛馬屋五郎	5,491		57.950	1,853
10		住徳丸市右衛門	塩屋藤十郎	4,802	49	53.314	1,685
11	慶 応 3 年 1 月	神力丸直七郎	小西茂十郎	5,376	65	64.644	1,844
12		観晃丸砂太郎	富田屋吉之助	5,844	46	72.383	1,813
13		八幡丸喜一郎	富田屋儀助	6,000	34	61.631	—
14		神社丸喜太郎	柴田正次郎	5,325	15	63.873	1,900
15	2 月	寿力丸徳次郎	西田正十郎	5,294	42	65.972	1,826
16		住砂丸吉蔵	藤田伊三郎	4,767		55.821	1,646
17		海静丸祖七郎	小堀屋新兵衛	5,190	72	66.925	2,057
18		万楽丸正太郎	柏屋勘太郎	5,331	42	63.989	1,880
19		大幸丸徳八	大津源之助	5,470	33	54.331	1,708
20		砂晃丸米作	毛馬屋五郎	5,556		57.783	1,886
21		神吉丸栄次郎	柴田正次郎	6,261	16	63.144	1,897
22		成光丸半左衛門	小堀屋新兵衛	6,258	18	(65.863)	1,507
23		砂宮丸徳一	大津屋源之助	5,523	19	60.106	1,898
24		喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	6,085	54	65.752	1,846
25		神砂丸大八	富田屋儀助	6,634	17	57.214	—
26	3 月	九旺丸喜作	西田正十郎	5,621	15	60.965	1,807
27		明旺丸米太郎	小西茂十郎	5,697	13	62.490	1,918
28		安全丸慶造	柏屋勘太郎	5,737	15	65.700	1,701
29	4 月	砂宝丸安治郎	日野屋利右衛門	4,729	13	44.448	1,421
30		神力丸直七郎	小西茂十郎	5,643	15	58.919	1,860
31	5 月	海静丸祖七郎	小堀屋新兵衛	5,517	55	55.993	1,812
32		神通丸覚之助	毛馬屋五郎	5,607	33	(75.843)	1,758
33		順風丸作太郎	富田屋吉之助	5,178		51.432	1,604
34		神砂丸悦太郎	吉田亀之助	6,107	20	57.960	1,820
35		安全丸慶造	柏屋勘太郎	6,415	23	56.108	1,614
36		九旺丸喜作	西田正十郎	5,009	68	(56.156)	1,767
37		神吉丸栄次郎	柴田正次郎	6,071	11	55.011	1,900
38	6 月	砂宮丸徳一	大津屋源之助	5,005	36	64.041	1,905
39		住光丸富五郎	日野屋利右衛門	6,170		69.365	1,945
40		喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	5,748	42	58.429	1,850
41		砂晃丸米作	毛馬屋五郎	5,182	32	63.513	—
42		明旺丸米太郎	小西茂十郎	5,844	19	62.619	1,915
43		成光丸半左衛門	小堀屋新兵衛	5,567	31	58.810	1,800
44		神静丸弥八	柴田正次郎	5,253	29	65.057	1,900
45		7	神辰丸鉄之助	大津屋源之助	4,868	49	62.024
46	寿光丸市太郎		小堀屋新兵衛	4,651	43	56.759	1,687
47	寿力丸徳次郎		西田正十郎	5,327	34	(61.404)	1,839

番 号	年 月	船 名	仕 建 元	荷 数	伝言物	運 賃	本 石
48	月	海 静 丸 祖 七 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	4,773	97	銀 貫 匁 65,212	2,047
49		神 護 丸 喜 十 郎	日 野 屋 利 右 衛 門	5,217	66	65.539	1,942
50		神 力 丸 直 七 郎	小 西 茂 十 郎	5,355	34	65.511	1,841
51		住 砂 丸 吉 蔵	藤 田 伊 三 郎	4,740	43	56.214	1,637
52	8 月	歛 晃 丸 砂 太 郎	富 田 屋 吉 之 助	5,757	44	62.202	1,823
53		九 旺 丸 喜 作	西 田 正 十 郎	5,190	29	(59.231)	1,812
54		大 幸 丸 徳 八	大 津 屋 源 之 助	4,913	49	46.703	1,698
55		福 応 丸 吉 太 郎	柏 屋 勘 太 郎	5,696	21	60.826	1,731
56		砂 宝 丸 安 治 郎	日 野 屋 利 右 衛 門	4,587	13	42.378	1,503
57		安 全 丸 慶 造	柏 屋 勘 太 郎	5,972	27	65.579	1,785
58		神 吉 丸 栄 次 郎	柴 田 正 次 郎	6,079		62.717	1,900
59		恒 太 郎	吉 田 亀 之 助	5,377	7	(63.214)	1,815
60		住 光 丸 富 五 郎	日 郎 屋 利 右 衛 門	5,859	27	68.866	1,928
61	9 月	順 通 丸 正 太 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	5,270	15	62.691	1,957
62		喜 宝 丸 芳 太 郎	吉 田 亀 之 助	5,457	11	67.523	1,879
63		住 吉 丸 松 太 夫	小 西 茂 十 郎	5,183	10	70.454	1,921
64		砂 宮 丸 徳 一	大 津 屋 源 之 助	4,743	13	68.155	1,969
65		成 光 丸 半 左 衛 門	小 堀 屋 新 兵 衛	5,167	8	64.601	1,989
66		海 静 丸 祖 七 郎	〃	5,110	59	66.739	1,994
67		神 通 丸 寄 七 郎	富 田 屋 儀 助	3,810	32	41.808	—
68	10 月	明 宝 丸 徳 太 郎	毛 馬 屋 五 郎	5,585		69.796	1,835
69		砂 晃 丸 米 作	〃	4,941		62.139	1,858
70		明 旺 丸 米 太 郎	小 西 茂 十 郎	5,522	109	68.362	1,888
71		寿 光 丸 市 太 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	4,020	75	57.300	1,914
72		寿 力 丸 徳 次 郎	西 田 正 十 郎	4,743	97	(金 2 両 1 歩 (62.163))	1,764
73		神 辰 丸 鉄 之 助	大 津 屋 源 之 助	5,410	68	63.354	1,977
74		神 護 丸 喜 十 郎	日 野 屋 利 右 衛 門	5,184	81	63.053	1,817
75		神 静 丸 弥 八	柴 田 正 次 郎	5,758	32	63.414	1,890
76		神 力 丸 直 七 郎	小 西 茂 十 郎	5,181	29	62.396	1,828
77		順 風 丸 作 太 郎	富 田 屋 吉 之 助	4,981	20	57.592	1,737
78		住 砂 丸 吉 蔵	藤 田 伊 三 郎	4,157	19	49.328	1,490
79		福 応 丸 吉 太 郎	柏 屋 勘 太 郎	5,970	6	63.204	1,785
80		九 旺 丸 喜 作	西 田 正 十 郎	5,355	45	62.704	1,779
81		安 全 丸 慶 造	柏 屋 勘 太 郎	5,625	26	63.523	1,780
82	11 月	神 吉 丸 栄 次 郎	柴 田 正 次 郎	5,435	24	64.238	1,901
83		大 幸 丸 徳 八	大 津 屋 源 之 助	4,740	22	54.277	1,728
84		住 光 丸 富 五 郎	日 野 屋 利 右 衛 門	6,634	66	69.259	1,919
85		喜 宝 丸 芳 太 郎	吉 田 亀 之 助	5,883	60	67.665	1,870
86		住 吉 丸 松 太 夫	小 西 茂 十 郎	2,870	24	39.020	792
87		神 徳 丸 三 十 郎	大 津 屋 源 之 助	6,046	63	59.359	1,944
88		無 事 悦 七 八 郎	日 野 屋 利 右 衛 門	5,424	48	59.210	1,820
89	12 月	神 通 丸 覚 之 助	毛 馬 屋 五 郎	5,677		56.634	1,796
90		寿 力 丸 徳 次 郎	西 田 正 十 郎	5,018	220	62.793	1,815
91		順 通 丸 正 太 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	5,251	181	60.534	1,955
92		神 砂 丸 大 八	富 田 屋 儀 助	4,804	76	98.580	—
93		住 宝 丸 富 助	日 野 屋 利 右 衛 門	5,254		66.280	1,888
94		明 宝 丸 徳 太 郎	毛 馬 屋 五 郎	5,507	105	62.849	1,834
95		寿 光 丸 市 太 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	4,286	157	60.589	1,994
96		神 辰 丸 鉄 之 助	大 津 屋 源 之 助	5,319	207	60.132	1,930
97		海 静 丸 祖 七 郎	小 堀 屋 新 兵 衛	4,698	175	58.477	1,992

番 号	年 月	船 名	仕 建 元	荷 数	伝言物	運 賃	本 石
98		明旺丸米太郎	小西茂十郎	5,297 <small>箇</small>	156 <small>箇</small>	銀貫 匁 68.410	1,915 <small>石</small>
99	慶 応 4 年 2 月	砂宮丸徳一	大津屋源之助	4,627	45	62.777	1,901
100		九旺丸喜作	西田正十郎	4,621	17	63.450	1,796
101		砂晃丸米作	毛馬屋五郎	4,673	67	57.039	1,708
102		神護丸喜十郎	日野屋利右衛門	5,342	12	67.281	1,895
103		神砂丸悦太郎	吉田亀之助	5,660	48	60.304	1,830
104		安全丸慶造	小堀屋新兵衛	4,539	53	51.279	1,710
105		神吉丸栄次郎	柴田正次郎	6,204		48.001	1,620
106	3 月	福応丸吉太郎	柏屋勘太郎	5,549	40	57.945	1,710
107		神通丸寄七郎	富田屋儀助	4,882	9	46.098	—
108		住吉丸松太夫	小西茂十郎	5,871	41	63.076	1,804
109	4 月	住光丸富五郎	日野屋利右衛門	5,751	19	51.557	1,619
110		順風丸作太郎	富田屋吉之助	4,336	64	45.673	1,422
111		伊勢丸吉蔵		4,621	11	50.114	1,618
112	閏 4 月	歛晃丸砂太郎	富田屋吉之助	5,300	17	67.684	1,760
113		万楽丸正太郎	柏屋勘太郎	5,539	12	63.472	1,750
114	6 月	神静丸弥八	柴田正次郎	4,794	73	60.437	1,765
115		寿力丸徳次郎	西田正十郎	5,379	95	60.684	1,847
116		明宝丸徳太郎	毛馬屋彦五郎	5,754	59	68.677	1,853
117		寿光丸市太郎	小堀屋新兵衛	4,399	17	59.672	1,805
118		九旺丸喜作	西田正十郎	5,016	33	65.899	1,855
119		神通丸覚之助	毛馬屋五郎	4,939	50	61.358	1,800
120	7 月	神徳丸三十郎	大津屋源之助	5,419	12	61.658	1,894
121		無事悦七八郎	日野屋利右衛門	5,651	14	63.065	1,947
122		神護丸喜十郎	〃	5,572	23	55.853	1,767
123		神砂丸悦太郎	吉田亀之助	5,740	20	56.135	1,733
124	8 月	砂宮丸徳一	大津屋源之助	5,663	10	63.220	1,938
125		福応丸吉太郎	柏屋勘太郎	5,767	10	66.083	1,850
126		明旺丸米太郎	小西茂十郎	5,993	10	60.746	1,951
127		喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	5,295	10	65.548	1,850
128		順風丸作太郎	富田屋吉之助	4,584		59.239	1,608
129	明 治 元 年 9 月	住砂丸吉蔵	藤田伊三郎	4,314	3	54.334	1,663
130		神辰丸鉄之助	大津屋源之助	5,463	24	58.316	1,873
131		海静丸祖七郎	小堀屋新兵衛	4,270	112	54.662	1,718
132		八幡丸幸一郎	富田屋儀助	5,740	42	55.743	—
133		安全丸慶造	柏屋勘太郎	4,803	30	55.686	1,679
134		明宝丸徳太郎	毛馬屋彦五郎	6,997	70	67.866	1,856
135		神静丸弥八	柴田正次郎	6,339	22	60.065	1,750
136		住光丸富五郎	日野屋利右衛門	5,846	7	67.639	1,842
137		住徳丸栄太郎	柏屋勘太郎	3,717	8	33.912	1,118
138		寿力丸徳次郎	西田正十郎	5,589	84	63.302	1,779
139	10 月	住吉丸松太夫	小西茂十郎	6,535	20	62.177	1,936
140		住宝丸富助	日野屋利右衛門	6,116	41	61.247	1,807
141		九旺丸喜作	西田正十郎	5,929	54	61.926	1,819
142		順通丸正太郎	小堀屋新兵衛	6,144	17	62.566	1,877
143		寿光丸市太郎	〃	5,080	23	57.478	1,802
144		神徳丸三十郎	大津屋源之助	3,376	20	30.691	1,091
145		神通丸覚之助	毛馬屋五郎	6,196	76	59.067	1,825

番 号	年 月	船 名	仕 建 元	荷 数	伝言物	運 賃	本 石
146	11 月	神通丸寄七郎	富田屋儀助	2,825	筒 13	銀貫 匁 23.794	—
147		喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	5,677	91	67.093	1,850
148		神力丸直七郎	小西茂十郎	5,317	88	56.275	1,705
149		海静丸祖七郎	小堀屋新兵衛	5,023	172	(63.510)	2,168
150		神護丸喜十郎	日野屋利右衛門	5,364	180	59.366	1,797
151		吉七郎	富田屋吉之助	5,925	89	64.657	1,765
152		神砂丸悦太郎	吉田亀之助	5,093	117	60.632	1,730
153		無事悦七八郎	日野屋利右衛門	5,471	130	67.450	1,796
154		寿力丸徳次郎	西田正十郎	4,405	100	60.754	1,713
155		神辰丸鉄之助	大津屋源之助	4,941	112	54.898	1,838
156		住光丸富五郎	日野屋利右衛門	6,351	102	68.447	1,868
157	12 月	神静丸弥八	柴田正次郎	5,967		60.418	1,850
158		順風丸作太郎	富田屋吉之助	5,342	61	55.242	1,599
159		明宝丸徳太郎	毛馬屋彦五郎	5,836		57.612	1,755
160		住砂丸吉蔵	藤田伊三郎	5,112	22	49.342	1,551
161		慶蔵	富田屋吉之助	5,711	96	60.004	1,695
162		九旺丸喜作	西田正十郎	5,747	57	(金200両 49.268)	1,796
163		八幡丸喜一郎	富田屋儀助	3,115	20	(金360両 36.598)	—
164		明旺丸米作	小西茂十郎	5,975	81	68.561	1,913
165	明治 2年 1月	喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	6,715	63	64.694	1,840
166		住宝丸富助	日野屋利右衛門	6,072	54	57.496	1,613
167		寿光丸市太郎	小堀屋新兵衛	5,380	26	55.646	1,887
168		砂宮丸徳一	大津屋源之助	4,497	33	55.447	1,640
169		順通丸正太郎	小堀屋新兵衛	4,698	31	61.076	1,829
170	2 月	神力丸直七郎	小西茂十郎	5,227	31	57.302	1,583
171		神徳丸三十郎	大津屋源之助	5,784	58	(金40両 58.553)	1,788
172		欽晃丸砂太郎	富田屋吉之助	5,552	24	63.221	1,753
173		神通丸寄七郎	富田屋儀助	6,301	13	(金146両 42.139)	—
174		神砂丸悦太郎	吉田亀之助	6,405	19	59.473	1,772
175		神吉丸栄次郎	柴田正次郎	5,992	32	64.438	1,800
176		神静丸弥八	〃	5,742	24	57.805	1,800
177		寿力丸徳次郎	西田正十郎	5,690	13	(金72両 49.270)	1,717
178		福応丸吉太郎	柏屋勘太郎	6,790	10	57.589	1,815
179		順風丸作太郎	富田屋吉之助	5,167	13	47.640	1,576
180		神護丸喜十郎	日野屋利右衛門	5,026	12	48.648	1,769
181		無事悦七八郎	〃	5,311	16	49.682	1,661
182	3 月	九旺丸喜作	西田正十郎	5,130	33	54.049	1,715
183		喜宝丸芳太郎	吉田亀之助	5,731	23	60.099	1,848
184		安全丸慶造	柏屋勘太郎	3,917	25	43.008	1,180
185		神辰丸鉄之助	大津屋源之助	5,313	51	50.079	—
186		住宝丸富助	日野屋利右衛門	4,711	3	45.784	1,643
187		明宝丸徳太郎	毛馬屋彦五郎	6,224	20	57.672	1,795
188		悦一郎	柏屋勘太郎	5,304	25	53.426	1,700
189		住砂丸吉蔵	藤田伊三郎	5,107		49.881	1,653
190		寿光丸市太郎	小堀屋新兵衛	5,409	7	51.694	1,856
191		住徳丸栄太郎	柏屋勘太郎	3,327	8	31.362	1,255
192		福吉丸栄次郎	柴田正次郎	5,817	12	57.599	1,820
193		砂宮丸徳一	大津屋源之助	5,872	10	51.341	—
194		海静丸祖七郎	小堀屋新兵衛	4,287	26	39.280	1,361

番 号	年 月	船 名	仕 建 元	荷 数	伝言物	運 賃	本 石
195	4 月	福応丸吉太郎	柏屋勘太郎	6,552	1	59.510	1,801
196		住光丸富五郎	日野屋利右衛門	6,006	7	49.324	1,775
197		歛晃丸砂太郎	富田屋吉之助	5,969	17	49.669	1,766
198		寿力丸徳次郎	西田正十郎	5,537	20	51.289	1,659

注) 運賃で銀は1匁未満切捨、金は1両未満切捨とした。本石は1石未満切捨とした。

応2年12月から明治2年4月までの30か月（内閏月が1回）のうちに運航されている船は、同一船が船名変更されていないものとすれば45艘（第2表参照）である。＜史料2＞によれば、安政期に菱垣荒荷建の廻船数は45艘とされており、この規定はその後も効果をもったとみてよいであろう。

荷数は、各品目の単位がバラバラであるにかかわらず、すべて1箇として合計したものである。油は大樽（4斗か）と小樽（1斗）にわけて、記載されていることが多い。木綿は箇、稀に丸が付されている。紙は丸、蠟は丸ないし箇が単位である。砂糖は樽か挺が付されており、⊕、白砂、トサ（土佐）、大ミツ（蜜）・小蜜などの内訳がたまに記されている。菓種は箇、丸、樽などが単位で、大島として挺が付されている場合がある。鉄は箇か束、金物は箇が多い。鯉節は樽か箇、干魚も同様である。集荷物・荒物・諸荷物などと記されたものは大部分箇で、たまに樽、俵などを含む。そのほか綿は本、青苳は束、畳表は丸か箇、米・糠は俵である。

なお、商品別ではない御屋敷、大坂取、大坂払、兵庫積、浦賀揚などの項目があり、これらは運賃の算出や支払方法の相違から別記されたものらしい。このほか、箇数のみで運賃・本石の記載がない伝言物という項目があり、贈答品などを依頼したものと思われる。

これら諸種の単位の諸商品を合計したにもかかわらず、箇数はほぼ5,000台に集中している。86番住吉丸松太夫船が2,870箇と少ないのは、紀州大島で2,840箇、本石1,067石余を別に積みこんだためであり、ほとんどの船が4,000～6,000箇の積荷を行なっている。荷役の関係から、1点あたりの重量・容積には一定の限量があったと思われるので、単位はマチマチでも合計はほぼ同一箇数となったのであろう。第4表は、慶応3年1年間の荷数を品目別にまとめたものである。単位の相違を無視したため、大体の傾向をみることはできない。

なお、品目別の箇数を合計したものが、原史料で合計として記されている数字に一致しないことがしばしば

あったが、第1表の荷数は原史料で合計としている数字をとった。また、合計に伝言物箇数が含まれていると思われる場合にはそれを差し引いている。

運賃は大部分の廻船で品目別に元値が記載されている。明治2年2月の175番神吉丸栄次郎船までは、元値に対して20割の割増がなされ、176番以降は18割増である。ただし、町方江戸取、同大坂取、御屋敷江戸取、同大坂取、浦賀取、兵庫江戸取など運賃項目は複雑で、割増のつけ方も一律でなく、内容がよくわからない。第1表の運賃額は、原史料で総計が出ているもの、総計がなくとも項目別に元値と割増額が記されていて総計が算出できるものを示したもので、元値のみで項目別の割増記載がないものは、元値を3倍（全項目20割増）してかっこを付した。

この運賃割増については、幕末期の諸物価高騰の波のなかで、廻船がわから繰返し要求が出され、＜史料3＞の「荒荷廻船取締規定帳」では船頭や水主たちの賃金・心付定が“試み”としてなされたことがわかり、また＜史料4＞の樽廻船問屋願書では、廻船持たちが20割増を要求して九店と対決した状況を知ることができる。

「手板控」で本石として記された数字は、石井謙治氏の御教示によると、各商店の重量を米1石の重量（40貫目）に換算して石数を出したものであろうとのことで、これによって廻船ごとの各商品の積載重量とその比率を求めることが出来る。第3表は慶応3年・明治元年の積荷本石を項目別に整理したものである。ただ、廻船のなかには本石として記載されておりながら、総計が10石にもみえない小額の石数が記されている場合があり、これは小廻り（内容不明）という表示で記さるべき数字のようであって、他廻船と同様に扱うことができない場合がある。また箇数のみで本石が脱落しているもの、数字に誤りがあったり項目に脱落があるのではないかと思われるものもあったので、これらは調査対象からはずした。第3表で出帆艘数と調査艘数で差があるのはそのためである。

この本石数量は、各廻船の公称積石とそれ程大きく

第2表 廻船運航状況

仕建元	船名	慶応2年	慶応3年	明治元年	明治2年	回数
小堀屋新兵衛	順通丸正太郎	1 12	61 9 91 12	142 10	169 1	5
	寿光丸市太郎	8 12	46 7 71 10 95 12	117 6 143 10	167 1 190 3	8
	海静丸祖七郎		17 2 31 5 48 7 66 9 97 12	131 9 149 11	194 4	8
	成光丸半左衛門		22 2 43 6 65 9			3
	安全丸慶造 計	2	13	104 2 6	4	1
日野屋利右衛門	砂宝丸安治郎	5 12	29 4 56 8			3
	神護丸富五郎	7 12	49 7 74 10	102 2 122 7 150 11	180 2	7
	住光丸富五郎		39 6 60 8 84 11	109 4 136 9 156 11	196 4	8
	無事悦七八郎		88 11	121 7 153 11	181 2	4
	住宝丸富助 計	2	9	140 10 9	166 1 186 3 5	4
大津屋源之助	住静丸源太郎	6 12				1
	大幸丸徳八		19 2 54 8 83 11			3
	砂宮丸徳一		23 2 38 6 64 9	99 2 124 8	168 1 193 4	7
	神辰丸鉄之助		45 7 73 10 96 12	130 9 155 11	185 3	6
	神徳丸三十郎 計	1	10	120 7 144 10 6	171 2 4	4
西田正十郎	九旺丸喜作	2 12	26 2 36 5 53 8 80 10	100 2 118 6 141 10	162 2 182 3	10
	寿力丸徳次郎		15 2 47 7 72 10 90 12	115 6 138 9 154 11	198 4	9
	計	1	8	7	3	19
	万楽丸正太郎		18 2	113 閏4		2
	安全丸慶造		28 3 35 5 57 8 81 10	133 9	184 3	6
柏屋勘太郎	福応丸吉太郎		55 8 79 10	106 3 125 8	178 2 195 4	6
	住徳丸栄太郎			137 9	191 3	2
	悦一郎 計		7	5	188 3 5	1
	神力丸直七郎		11 1 30 4 50 7 76 10	148 11	170 2	6
	明旺丸米太郎		27 3 42 6 70 10 98 12	126 8 164 12		6
小西茂十郎	住吉丸松太夫		63 9 86 11	108 3 139 10		4
	計		10	5	1	16

仕建元	船名	慶応2年	慶応3年	明治元年	明治2年	回数
柴田正次郎	神社丸 弥八	3 12	14 1			1
	神社丸 喜太郎		21 1	105 2	175 2	1
	神社丸 栄次郎		37 5	114 6	176 2	7
	神社丸 弥八		44 6	135 9		6
	計	1	7	4	3	15
吉田亀之助	喜宝丸 芳太郎		24 2	127 8	165 1	8
	神砂丸 悦太郎		34 5	103 2	174 2	5
	恒太郎		59 8	123 7		1
	計		6	5	3	14
富田屋吉之助	歛見丸 砂太郎		12 1	112 閏4	172 2	5
	順風丸 作太郎		33 5	110 4	179 2	6
	吉七郎		77 10	128 8		1
	慶藏			151 11		1
	計		4	6	3	13
毛馬屋五郎	神通丸 覺之助	9 12	32 5	119 6		5
	砂晃丸 米作		20 2	101 2		4
	明宝丸 徳太郎		68 10			2
	計	1	7	3		11
富田屋儀助	神通丸 寄七郎	4 12	67 9	107 3	173 2	5
	八幡丸 喜一郎		13 1	132 9		3
	神砂丸 大八		25 2	163 12		2
	計	1	4	4	1	10
藤田伊三郎	住砂丸 吉造		16 2	129 9	189 3	6
	計		3	2	1	6
毛馬屋彦五郎	明宝丸 徳太郎			116 6	187 3	4
	計			3	1	4
塩屋藤十郎	住徳丸 市右衛門	10 12				1
	計	1				1
	伊勢丸 吉藏			111 4		1
	計			1		1
	総計	10	88	66	34	198



第3表 九店差配船による輸送商品積石

(単位: 石)

年 月	慶応3.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	%
調査艘数/出帆艘数	3/4	10/11	3/3	2/2	7/7	4/7	7/7	9/9	6/7	14/14	6/7	9/10	80/88	
砂糖	2,568	6,749	1,415	881	1,264	1,473	4,981	4,301	3,644	5,164	3,565	7,424	43,432	29.4
油	404	2,233	876	532	2,715	1,455	2,358	1,633	2,901	3,736	800	2,157	21,804	14.7
紙	525	2,453	960	128	1,349	779	1,735	2,167	958	3,195	1,462	617	16,332	11.0
鉄・金物	369	745	267	306	1,037	495	790	872	538	931	536	592	7,483	5.1
蠟	213	896	424	54	570	460	510	225	423	1,290	599	973	6,642	4.5
鯉節・干魚・数の子	101	385	92	50	369	321	537	584	363	1,244	999	802	5,852	4.0
菓	72	844	90	25	249	189	162	387	677	649	407	293	4,048	2.7
木綿	169	543	123	94	337	240	250	406	347	571	321	234	3,641	2.5
繰				21	26		10			2,145	132	149	2,484	1.7
糠						160	272	1,008					1,440	1.0
青 蕨・畳表	85		107		16		16	116	28	94	52		516	0.3
米										50			50	0.0
集荷物・荒物	928	3,122	993	693	2,379	1,448	1,006	3,024	1,490	5,112	2,380	2,965	25,545	17.3
大坂取・大坂払	66	128	30	30	580	372	70	224	76	201	234	181	2,199	1.5
兵庫庫積	8	100	1	385	570	20		555	30	454	187	353	2,666	1.8
浦賀揚	37	84	44	53	70	97	40	157	31	246	132	144	1,140	0.8
計	5,548	18,285	5,426	3,256	11,538	7,512	12,742	15,664	11,511	25,088	11,812	16,890	145,278	98.3
御屋敷荷	8	153		25	926	56	175	328	198	333	164	259	2,627	1.8
御用銅												29	29	0.0
計	8	153		25	926	56	175	328	198	333	164	288	2,656	1.8
総 計	5,556	18,439	5,426	3,281	12,464	7,568	12,917	15,992	11,709	25,422	11,977	17,178	147,934	100.0

注) 1石未満切捨, 計の数字は各項目の切捨以前の数字を合計したものから, 1石未満を切捨てたものである。

第3表 (つづき)

(単位: 石)

年 月	慶応4.2	3	4	閏4	6	7	8	明治1.9	10	11	12	計	%
調査艘数/出帆艘数	7/7	2/3	3/3	1/2	6/6	4/4	4/5	9/10	6/6	9/12	6/8	57/66	
砂糖	4,898	973	1,178	900	5,324	1,703	2,196	3,539	1,523	5,355	2,916	30,508	30.3
紙	973	394	285	280	1,593	2,060	1,587	3,442	1,999	909	1,359	14,886	14.8
油	846	170	202	78	1,032	623	1,177	1,906	1,171	1,643	624	9,476	9.4
蠟	845	114	286	115	541	362	420	939	520	1,079	151	5,377	5.3
鯉節・干魚・数の子	623	124	18	98	488	429	447	551	621	884	268	4,556	4.5
鉄・金物	307	140	213	29	243	239	78	655	809	894	344	3,956	3.9
木綿	198	63	98	40	151	110	162	542	454	629	260	2,710	2.7
米							210		390		1,914	2,514	2.5
菓	186	56	351	90	204	118	109	358	371	526	93	2,466	2.5
青 蕨・畳表		75	125			73		11	33	126		443	0.4
繰	2				133	50					69	256	0.3
糠	100					100						200	0.2
集荷物・荒物	2,791	826	1,126	120	1,123	1,358	952	3,139	2,251	3,804	2,270	19,763	19.7
大坂取・大坂払	96	27	216	10	59	30	3	112	109	470	106	1,243	1.2
兵庫庫積	348		316									665	0.7
浦賀揚	223	92	248		29	49	2	61	92	202	30	1,033	1.0
取次屋荷物		450										450	0.4
計	12,442	3,509	4,665	1,760	10,927	7,310	7,348	15,259	10,348	16,527	10,408	100,508	99.9
御屋敷									4		34	39	0.0
総 計	12,442	3,509	4,665	1,760	10,927	7,310	7,348	15,259	10,353	16,527	10,443	100,547	100.0

第4表 九店差配船による輸送商品荷数

年	月	慶応3.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計			
調	査	艘	数	4	11	3	2	7	7	7	9	7	14	7	10	88	
砂	糖	6,584	15,332	3,018	2,008	2,529	5,160	10,027	8,719	7,515	10,954	7,463	16,294	95,603			
		30	416	72		350	275	35	149	381	522	50	370	2,650			
		1,268	4,723	2,126	1,065	5,186	4,827	4,361	3,521	6,264	7,074	1,591	4,320	46,326			
鉄・金	紙	2,968	10,181	2,793	534	4,682	4,393	6,934	8,819	4,603	12,389	5,481	2,245	66,022			
		1,736	3,346	887	1,102	3,450	2,946	2,787	3,632	2,065	3,638	1,813	2,261	29,663			
		697	2,226	1,146	136	1,427	1,838	1,311	623	1,268	3,300	1,490	2,551	18,013			
鯉節・干魚・数の子	蠟	357	1,275	268	163	1,172	1,789	1,741	1,899	1,364	4,256	3,457	2,770	20,511			
		240	1,333	274	84	643	560	488	990	1,537	1,531	955	703	9,338			
		445	1,090	276	259	650	714	454	721	642	1,150	504	351	7,256			
菓	種	15			29	45		15			3,235	249	318	3,906			
						350	550	750	2,600					4,250			
		804	1,101	962		125		125	1,042	212	742	521		5,634			
青	蕈・畳						250				150			400			
		5,405	16,807	4,560	2,789	11,675	12,014	5,079	12,072	7,918	20,763	11,428	12,266	122,776			
		228	364	433	85	563	1,331	249	1,174	245	550	705	499	6,426			
兵	庫	1,067	2,080	100	1,941	2,774	997		2,095	108	965	536	1,635	14,298			
		255	256	129	171	220	447	117	657	93	734	363	523	3,965			
		22,099	60,530	17,044	10,366	35,841	38,091	34,473	48,713	34,215	71,953	36,606	47,106	457,037			
御	屋	敷	荷	28	635	4	75	4,079	882	451	651	603	871	443	3,876	12,598	
																100	100
				28	635	4	75	4,079	882	451	651	603	871	443	3,976	12,698	
伝	言	物	160	314	43	28	180	189	368	214	151	653	312	1,277	3,889		
			22,287	61,479	17,091	10,469	40,100	39,162	35,292	49,578	34,969	73,477	37,361	52,359	473,624		

注) 樽, 箇, 挺, 丸, 束, 俵等各種の単位をそのまま合計したもので, 点数とみなしてよい。

かけ離れたものではない。第5表は弘化4年から明治元年にかけての大坂・江戸両地九店世話番間の往復書状のなかで、積石数のわかる新造・運航廻船を書抜いたものである。幕末にかけて廻船の大型化が進み、安政3年までは雇船を除けば1,600石、1,700石積が大部分であったのが、安政4年以降は1,800石、1,900石積が多く、1,950石の船もある。〈史料2〉では、安政6年(1859)に以後新造は1,800石積とすることを九店では申告しており、和船大型化の頭打ちがみられた。第1表に示すように、本石で2,000石を超えるものは数えるほどであり、大部分は1,700~2,000石以内である。

九店が差配廻船の艘数・積石を制限したのは、幕末期になると諸商品の積荷が減少し、仕建に日数を要するようになったからであるらしい。第2表は第1表所載の廻船の運航状況を示したもので、イタリックの数字は第1表の番号を示し、その隣の数字は月を示す。たとえば小堀屋新兵衛仕建の順通丸正太郎船は、慶応2年12月、慶応3年9月、同年12月、明治元年10月、

明治2年正月と5回の運航を行なっている。総体としていえることは、年間に5回運航する船は稀で、多くとも年4回が精々であって、嘉永・安政期に樽廻船が年6回ないしそれ以上運航している<sup>2)</sup>のに比較して運航の回数が少ない。動乱の頂点の時期であったためであろうか。船荷の集まりがはかばかしくないため、仕建方について江戸・大坂間で相談をする必要があり、〈史料5〉から〈史料8〉はその間の事情を示すものである。

なお、和船による大坂―江戸間の運航時間は当時どの位かかったのだろうか。〈史料1〉に示す綿廻船の記録は、もっとも好条件下で競争した場合のものであるが、大坂を出帆した11艘はいずれも3日以内に江戸へ入津しており、最短時間の船は2日間と1刻(約50時間)でついている。一般の廻船はこうもいかないであろうが、天候条件が良ければかなり速く往復できた

2) 柚木学「近世海運業における廻船経営の特質——賃積船と買積船をめぐって——」(『海事史研究』第18号)、牧田りゑ子前掲論文。

第5表 幕末期における廻船積石

年 代	積 石	船 名	仕 建 元	備考
弘化4	1,600 <sup>石</sup> 900	久宝丸 弥三郎 神力丸 大五郎	常念屋 常太郎 富屋利 右衛門	
嘉永3	1,700 1,600 1,600 1,400 1,600	伊勢丸 重太郎 青柳丸 市二郎 大恵丸 万太郎 住吉丸 吉太郎 寿悦丸 徳助	小西新 右衛門 毛馬屋 五郎 小西新 右衛門 辰屋 仙助 小堀屋 新兵衛	
安政2	800 1,000 750 750	鳳丸 佐兵衛 伊栄丸 半右衛門 虎栄丸 吉五郎 信栄丸 吉松	日野屋利 右衛門 藤田伊 三郎 辰屋 仙助 "	雇船 " " "
安政3	1,700 1,600 1,800 1,700 1,700 1,600 1,700 1,700 1,700	延寿丸 惣五郎 神農丸 鉄之助 住力丸 富蔵 辰福丸 与市 住証丸 常五郎 和光丸 虎蔵 寿悦丸 徳助 金吉丸 惣一郎 万宝丸 芳十郎	毛馬屋 五郎 大津屋 源之助 日野屋利 右衛門 辰屋 仙助 木屋 市蔵 藤田伊 三郎 小堀屋 新兵衛 日野屋利 右衛門 毛馬屋 五郎	
安政4	1,800 1,800 1,800 1,900 1,700 1,900 1,900 1,800 1,800	明德丸 正十郎 大悦丸 徳五郎 神恵丸 半十郎 神徳丸 半六 神通丸 半五郎 住寿丸 新右衛門 九旺丸 喜作 明旺丸 米太郎 海静丸 祖七郎	西田正 十郎 大津屋 源之助 大津屋 権右衛門 大津屋 源之助 毛馬屋 五郎 日野屋利 右衛門 西田正 十郎 小西新 右衛門 小堀屋 新兵衛	
安政5	1,800 1,800 1,800	寿力丸 徳治郎 神社丸 喜三郎 辰護丸 鉄太郎	西田正 十郎 柴田正 次郎 富田屋 儀助	
安政6	1,800 1,950	北辰丸 徳三郎 住沢丸 常八	大津屋 源之助 柴田正 次郎	
万延1	1,900	永徳丸 金蔵	木屋 市蔵	
文久1	1,800	八幡丸 喜一郎	富田屋 儀助	
文久2	1,800	神静丸 弥八	柴田正 次郎	
元治1	1,800 1,800 1,800	欲晃丸 佐太郎 無事悦 七八郎 西一丸 弥平治	大津屋 源之助 日野屋利 右衛門 富田屋 儀助	
慶応1	1,800	相生丸 増蔵	藤田伊 三郎	
慶応2	1,800 1,700	隆盛丸 常一 砂宝丸 安次郎	塩屋 藤十郎 日野屋利 右衛門	
慶応3	1,800 1,800	安全丸 慶蔵 福応丸 吉太郎	柏屋 勘太郎 "	
明治1	1,300	徳正丸 栄太郎	柏屋 勘丸郎	

と思われるので、仕建時間が短縮されれば年間6回以上の運航も十分可能だったとみてよからう。

明治期に入ると、沿岸航海にも蒸気船が用いられることが多くなり、商品輸送も行なわれるようになった。〈史料9〉〈史料10〉は、東京の廻船問屋が蒸気船差配や手船化をするようになったことを示すものである。「妊婦丸」という変った名前がつけられているのも、いかにも明治期らしい。

今回の整理で筆者がもっとも興味深く思ったのは、第3表の示す数字である。慶応3年、明治元年とも石数=重量のもっとも多いのは砂糖であり、両年とも調査廻船全体の積石の30%前後を占めている。慶応3年は第2位が油、第3位が紙であるが、明治元年はその逆となり、他の品目も順位に変動があるが、砂糖は他商品とは飛抜けて大きい比重を示す。また、享保期の大坂より江戸入津品目のなかで重要視された繰綿が大きく減少し、木綿も2.5%、2.7%といった小さな率を占めるにすぎない。これは東海・関東地方における棉作および木綿生産の発展、大坂を経由しない他地域からの繰綿・木綿の直送りの盛行によるものではないだろうか。

文化期以降の江戸問屋仲間による流通独占の大きなテコとなった三橋会所設立の経緯をみると、江戸における砂糖問屋の勢力増大、その背景にある江戸及び東国での砂糖消費量の増加が推察されるのであるが、幕末・維新时期の九店扱い商品のなかで砂糖がこれ程大きな額を占めているとは思わなかった。明治期以降、洋糖の輸入が大きく伸びていったのも、近世後期における和糖の生産・流通量の増大がその基盤にあったからといえるのではないだろうか。さらに、原料を国外に求めながら、内国資本による精糖業が展開していく過程をみると、綿業と似たような状況があったともいえるのであって、こうした意味でも木田家文書九店史料は筆者の関心を強く引くものである。今後さらに分析を深めたいと思っているが、今回はその一端を紹介するにとどめたい。

#### 〈史料1〉

安政6年10月17日付

江戸九店世話番より大坂九店世話番宛書状

一筆啓上冷氣之節御座候所、先以其御地各様益御仕栄被成御座、珍重之御義奉賀候  
(めでたく)  
一新綿番船御地十二日申上刻愛度出帆被致候所、風順

克十五日不残浦賀入、孰も丹精相頭早着大慶奉存候、  
着順則

一十五日已上刻 西田正十郎  
一同 已中刻 日野屋富五郎  
一同 已下刻 小堀屋正太郎  
一同 富田屋善太郎  
一同 吉田悦太郎  
一同 日野屋惣一郎  
一同 藤田金吉

右十二日出帆切手御渡方之砌混雜有之、三艘出帆相  
後レ、翌十三日已上刻出帆ニ相成候趣、夫々御書付  
御渡被遣候之处、是亦稀代之早着ニ相成申候、則

一十五日午上刻 大津屋半六  
一同 未上刻 塩屋秀太郎  
一同 未下刻 毛馬屋徳太郎

右之通早着ニ御座候、同日之出帆ニ候得は壱式三ニ  
も可相成義ニ奉存候ニ付、此三艘えは別段褒美いた  
し遣し度奉存候、尚又大津屋半十郎船出帆之砌、店  
方之者不調法有之候て、番外ニ被仰付候ニ付差除候  
得共、入津は同日ニ御座候、此段得貴意度如斯御座  
候、恐々謹言

未十月十七日

江戸九店

世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

## <史料2>

安政6年11月晦日付

江戸九店世話番より大坂九店世話番宛書状

先月廿五日出御状相達辱拝見仕候、向寒相成候所先  
以各様倍御仕健被成御座、珍重御義奉賀候

一一般菱垣荒荷建船数取極之義申上候所、御承知被成  
候て早速両廻船問屋衆え御談被下、当時現船四拾五  
艘、外ニ新造興行取掛被申候四艘差加、都合四拾五  
艘ニて取極可申旨被仰下、辱承知仕候

一右船数取極候ニ付、船無数之衆中より御書付を以、  
時節宜敷砌ニは古名代ニ不拘増船相願被申度趣、其  
余思ひ々々之願書御加封被成下、自己之思召ニては  
御尤ニ奉存候得とも、是を一々取上候ては際限無之、  
四拾五艘も有之候得は十分余ニ相成申候事ニ付、永  
久之取極いたし、年来御世話御引立被遣候船々先操  
新造作替、相続之基後年迄も御取締之廉相立、船々

惣体之繁昌相祈、於荷主中も運送弁利同様之義ニ奉  
存候間、再忒規定御相談申上候、宜敷御評談被成下、  
思召ニ不相叶義は無御遠慮可被仰下候様奉希上候

一菱垣廻船問屋

小堀屋新兵衛仕建

海静丸祖七郎船

寿光丸市太郎船

成光丸半左衛門船

順通丸正太郎船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

日野屋利右衛門仕建

神護丸彦十郎船

釘店丸富之助船

住光丸富五郎船

住悦丸新右衛門船

金吉丸惣一郎船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

大津屋権右衛門仕建

神恵丸半十郎船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

大津屋徳之助仕建

神徳丸半六船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

富田屋儀助仕建

辰生丸悦六船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

辰屋仙助仕建

辰幸丸与六船

威光丸市右衛門船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

藤田伊三郎仕建

光吉丸金吉船

江戸問屋

錢屋卯兵衛支配

一樽廻船問屋

西田正十郎仕建

明德丸正十郎船

明通丸徳太郎船

明旋丸徳十郎船  
 寿力丸徳次郎船  
 寿通丸徳之助船  
 九旺丸彦作船  
     江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 北大津屋源之助仕建  
     住栄丸源太郎船  
     神辰丸鉄之助船  
     大幸丸徳八船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 南大津屋権右衛門仕建  
     順風丸作太郎船  
     歛晃丸砂太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 柴田正次郎仕建  
     四社丸弥八船  
     神社丸喜太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 小西新右衛門仕建  
     住吉丸松太夫船  
     明旺丸米太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 毛馬屋五郎仕建  
     明宝丸徳太郎船  
     万宝丸芳十郎船  
     神通丸半五郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 塩屋藤十郎仕建  
     嘉政丸秀八郎船  
     嘉宝丸秀太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 富田屋儀助仕建  
     航栄丸善太郎船  
     辰護丸鉄太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 藤田伊三郎仕建

住砂丸吉造船  
     江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 木屋市蔵仕建  
     住証丸常五郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
 吉田亀之助仕建  
     喜宝丸芳太郎船  
     神砂丸悦太郎船  
         江戸問屋  
         利倉屋金三郎支配  
     合四拾五艘  
     <sup>(般力)</sup>右之通今艘船数相定候条、此船々を以九店定世話差配可致候事  
 一菱垣方休株数多有之、向後開店被致候共九店差配仕建ニ無之、銘々手限家職被致候事は差構無之、九店差配船ニ加入被致度方は、四拾五艘兩組船々之内名題讓請加入可被致事  
 一兩組之内手船建無数、増船被致度向は、四拾五艘之内船主勝手ニて讓引被致、其船株を以増船可被致候事  
 一四拾五艘之内、乗納新造再興も不被致、名題仕舞置被申候事ハ不相成、早々外方え相讓可被申、彼是相拒被申候ハ、世話番にて相除、外店ニて代船差立可申事  
 一向後新造作建仕候得は、船石千八百石限可致候事  
 一江戸問屋両家之義、今度相改候船数請持之名前差配可被致候、此船々孰え讓替名代等受替ニ相成候共、元差配方之請持ニ可被致候、尤両家應對讓引被致候義は勝手次第之事  
 一菱垣方先井上名前開店之義も候とも、世話番并船主仕建元より差向候事は致間敷、両家相對振合之義差構無之事  
 一沖船頭心得違不出精之者ハ、無用捨世話番より相断可申事  
 一万一難風ニ出逢、行衛不相知候船は翌年限候事  
 一船元仕建元江戸両家之内、自然家業舩等閑ニ被致候敷不取締之義、都て規定ニ相振候取計方有之候ハ、兩地世話番中文通評談之上、不丹精之輕重ニ随ひ取計方可致候事  
 右は今般兩地九店世話番示談之上、兩廻船都合四拾五艘差配店ニ取極、仕建乗方取締規定之義は是迄取極仕来候通可被守事ニ候、当時現船前条之廉柄を以船株ニ

相成候ニ付、永久繁昌可被致候様、一己之情欲をはなれ実直ニ業体丹誠被致候ハ、九店世話番之功劳相頭、荷主・船主之幸福不可過之奉存候

前文取極一条相応御相談奉申上候、可然加筆可被成下候様奉希上候、先は右得御意度如斯ニ御座候、恐々謹言

未霜月晦日

江戸九店

世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

以別紙申上候、先達て船手規定帳御差下逐一披見仕候、右規定之廉々<sup>(故)</sup>沖船頭中守方之所相尋申候処、規定廉柄は指て巨障被申候者無之候得共、是迄内実帆待致来候船々も有之、右は元樽建之仕法相用被来候船主も可有之歟、左候得は帆待積為相止、給金増方ニ不相成候ては船頭不足可申義、依之銘々身ニ掛り候事故駈と返答不被致候事相違無之、是を押取極申候共忽相崩可申歟、又ハ船中不正之義出来、荷主中迄迷惑ニ及、不慥事ニ成行可申と奉存候間、帆待積嚴重ニ為相止候上は相当之給分増方致遣度奉存候、則

一金四両 船頭給金 但一上下

一金貳両 水主給金 右同断

一金拾貳両 心付

右之振合を以、船々惣躰無甲乙取極遣候得は嚴重之取締相付可申候、此上尚々増給被遣候ても情慾限無之、又々其例を申立不極ニ成行可申、何れにも帆待積為相止、其代心付不被遣候ては趣意相立不申、当春より運賃増にも相成帆待積相止候上ニは、船中心付別段余分と申義ニも相当り不申間、船主中能々会得被致、右之振合承知可被致候様仕度奉存候、右様相成候ハ、船頭中も相互ニ友吟味いたし、当地両家ニては瀬取方抜取調可仕候様取締為相付可申、此段御賢考被成下、両廻船方・船主中え御達被下行届候御報拝見仕、早々規定帳為相登可申、此段宜敷御承引被成下候様奉願上候、以上

霜月晦日

江戸九店

世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

### <史料3>

「慶応貳年丙寅正月

荒荷廻船取締規定帳」

廻船取締申合規定之事

一御公儀様御用物は勿論、諸家様御荷物並ニ商荷物共太切ニ取扱之儀は不及申、定積石之上決て押積致間鋪事

一九店御差配ニ差出し有之候船々は兼て約定も有之、何荷物ニても自儘撰積等決て不相成、平等之積方可致事

一水主之者、帆間賃<sup>(はまち)</sup>と唱荷物隠積致し手板相洩候義、全分量外之押積船足ニ拘、風波之節凌方之妨ニ相成可申ニ付、毎々取締右様不法之儀無之様申訓候得共、行届兼候哉矢張隠積致し候風聞以之外之亼ニ候、今般賃銀其外相当之心附等差遣候上は、万事嚴重ニ取計、別て乗組之内重立候者より氣を付、一同実直ニ相働可申亼

一仕建問屋之儀、仕来仕法有之儀ニ候得は、若心得違ニて船中肴代抔と唱、船頭・水主と馴合差含帆間賃積等取計候儀御座候ては、一体之取締ニ差障候事故、右様不都合之取計決致間敷候事<sup>(マツ)</sup>

一沖合取締之儀は廻船第一之儀ニて、別て厚配致仲間建相互ニ氣を付合俱吟味致、毛頭心得違無之様可致候事

一是迄船頭之内沖行事相定取締致来候得共、尚此度相改別て嚴重ニ致可申事

一仕建問屋えも不答、船頭内証ニて勝手ニ商ひ荷積合候義ハ風聞有之候、右は手板外全押積にて甚不埒之事ニ候間、以来決て不相成候事

一江戸表入津之砌、品川瀬取茶船之義折々心得違ニて不当之押積致、不調法出来候儀儘有之申訳も無之次第ニ付、今般茶船賃銀増方致遣し、手堅取締相付候上は、都て御荷物太切ニ為取扱候儀は勿論、定積石数より決て過上積為致申間敷候、大坂表御荷物積出し之節も同様取計可申候事

一船頭御荷主中え廻勤之儀は、登着より出帆迄日々相廻り、御荷物御願奉申上候、御荷物皆積立之上出帆当日ニ乗込候様仕癖ニ相成候ニ就ては、船中取締向自行届兼候、依之今般相改、登着之砌御荷主え御最良為御礼一度廻勤致、御荷物積懸り候より船中居詰ニ致、万端氣配御荷物太切ニ為取扱候義ハ不及申、道中筋浦々湊々ニても入湯之外決て上陸不相成候事  
一江戸入津致候ハ、御荷物皆取調之上、船頭上陸御荷主え為御礼廻勤可致事

一船頭心得方之儀は、太切之御荷物を預り遙々之海上乗下候義ニ付、第一船中一同不和合之儀無之様精々可申論候、数多之水主万一心得違之者有之程も難計、左様之者は早速暇差遣し、口入小宿え其旨相達置申候事

一心得違致候水主は兼て小宿え申付置、仲間一同召遣不申様、為其今般相改稼札相渡置候間、不埒之水主は稼札取上ケ、正路之水主と入替可申候事

一今般相改

船頭賃銀	}	当分試として 金六拾両式歩ニ定置
心附		
三役賃金		
心附		
平水主賃金		
心附		

右之通差遣し可申候

右之通一同集評之上規定取極申候間、無違失急度相守可申候、以上

船主連名

前書之通今般御取締ニ相成、其段銘々共え被仰聞承知仕候、然上は急度相心得、船中一同申合御荷物太切ニ取扱、手板洩積等決て仕間鋪候は勿論、海上乗走り無油断丹誠仕、不束之義無之様氣を付可申候、万一心得違右御取締之廉ニ相背候儀於有之は、如何体被仰付候共其節一言之申分無之候、為其銘々承知印形依て如件

船頭連名

#### <史料4>

「慶応貳年寅七月

上 菱垣一方積掛合之節  
樽方より差出候歎願書」  
書附ヲ以御願奉申上候

一銘々共仕建廻船之義、旧来御懇恵御引立ヲ以御積引被成下候ニ付、御蔭ヲ以業体相続仕、難有仕合ニ奉存候、然ル処天保十三寅年諸株御取放ニ相成、手広之御趣意被仰出、不相替安堵之渡世を仕居候得共、取締相崩れ銘々勝手凌ニ相成居候折柄、去ル弘化三年七月大時化にて、兵庫・神戸其外灘目にて仕建船ニ数艘破船ニ相成、積荷物は流失散乱致候得共、右御趣意後荒荷方御荷主ニ御行事役も無之、殿方が重立世話被成下候御方も無御座、手元及大混雑ニ、一同迷惑難渋いたし候ニ付、其後廿四組之内重積九店御荷主様重立候御方様へ、右様破船之節混雑不仕

候様御取締ニ預り度奉存候得共、其頃ハ菱垣問屋は漸々一両軒之儀ニ付、銘々共重々其段御願談奉申上、依之江坂御相談之上、已来御世話被成下候事ニ相成、翌末年より菱垣方ハ勿論、樽船之内荒荷定仕建廻船として規定相立、御約定書等差入、九店様御差配ニ相任せ、諸事取締能相成、尚又去ル嘉永丑年間屋仲間組合等以前之通被仰付、猶々手堅取締相成、御蔭ヲ以一同安業仕罷在候、然ル処近年打続米穀并ニ諸色高直にて、廻船立行不申難渋仕候ニ付、是迄年々運賃増相額、既ニ昨十一月仕建より元運賃ニ都合十割之増方申受、仕建方いたし居申候処、当春ニ至り諸色倍々大高直ニ相成、殊ニ米直段之義往古より承り不申位之高直ニ相成候ニ付、亦候廻船持算当不相立難渋之趣にて、当四月中船持中より願出候儀、元運賃ニ廿割増御願申上呉候様申出候ニ付、時節柄船方算当仕見候処、無余儀事ニ承知仕候ニ付其旨御願奉申上候之処、次第柄篤と御聞調之上、早速江戸店御世話番様え御示談之御書状被成下候得共、何分多分之増方相願候事にて、急速御取用ひ御勘弁被成下候場ニも難至、右ニ付ては願当不引合之廻船勤業も相成兼、無勘御一統様之御仁恵ヲ相待居候折柄、当節運賃増願一条ニ付ても樽方之者強情申募、既ニ休業いたし候ニ付ては、御府内諸品順沢之御趣意ニも差障り、且は御商法ニも相拘り候思召にて、右様之族差除キ菱垣一方積ニ御改法被遊度旨此度御来状ニ付、当地御一統様御評決之上、過日銘々共御呼出し之上、已来積法御改菱垣一方積ニ御取極、銘々共仕建廻船御積引御断之趣被仰聞、一同奉驚入候、既ニ運賃増方御願奉申上候一儀ニ付ても、昨今迄種々心配仕居候折柄、実ニ夢ニも更ニ不思御仰ヲ承り、今以一同大当惑心痛而已仕罷在候、前頭九店様御組立より最早廿々年余御懇情取引ニ預り、御蔭ヲ以業体相続仕、銘々共は勿論業体ニ相携候者共一統、難有仕合と日夜相歎罷在候儀、然ルニ今般右様御改法ニ相成候てハ、御差除ニ相成候船々之水主初メ、銘々共召遣之者共は不及申、銘々浜々上荷茶船之者共迄数百人之者忽立行出来不申、難渋は忽論眼前必至困窮可仕儀と寝喰打忘、極々苦心而已仕罷在候、尤右様御改法之儀ハ菱垣問屋五軒之者より御願奉申上候次第も御座候趣、元来運賃御増方奉願上候逆樽方一分之存意ニても無之、素々廻船持より願出、菱垣・樽船両問屋種々申談事候処、船方不算当にては自ト減船ニも相成、御積方御不弁利ニ相成候てハ奉恐入候、且は道具入件事等之儀怠候てハ御大切之御荷物

積方心配可仕候間、両組問屋共より種々申談し之上ニて願出候儀、然れハ樽方之者斗リ之強情と申儀ニても無御座、此儀は御堅察被遊可被下候、何分思召ニ相障り儀申上候段ハ幾重ニも恐入候得共、職分之役前と御聞訳被遊被下候て、偏ニ御仁免伏て御詫奉申上候、何分前条奉上候通、銘々共ハ兎も角、相携候者多人数之難渋御憐察被成下、格別之御賢愛ヲ以今一応御一統様御集評被遊被下候て、何卒江戸御表え御執成之上、是迄之通不相替様御積引被成下候様伏て奉願上候、此段書附ヲ以奉願上候、以上

慶応弐年

樽廻船問屋

寅七月

藤田伊三郎㊤  
塩屋九兵衛㊤  
吉田亀之助㊤  
柴田正二郎㊤  
西田正十郎㊤  
木屋市蔵 ㊤  
毛馬屋市蔵㊤  
小西茂十郎㊤

九店

御世話番様

<史料5>

慶応3年7月24日付

江戸九店世話番より大坂九店世話番宛書状

一筆啓上仕候、秋暑難凌御座候所、貴地各様倍御安泰可被成御座、珍重之御義奉賀上候

一般々仕建方之義、荷無数ニ付、当六月以来菱垣三艘樽方三艘ツ、順操ニ船付いたし、仮法切仕建ニ御取極ニ相成候趣ニ御座候得共、菱垣・樽方船数之多少有之候ニ付、船数多き方は自然先船有之候道理にて、同日登込候ても船付之遅速ニ而平等ニ不相成、跡廻リ之船手は空敷滞船いたし、無益之諸雑用相嵩、諸色高直之折柄取分難渋ニ可有之、右様切仕建ニ候ては是非共順番ニ船付いたし候事故、船之善悪、船頭之丹精・不丹精も不相頭、船手は励方も薄相成、且は跡船ニ不拘順番ニ而十分積切候様成行、足輕之出帆無覚束、海上之風波凌兼、万一之義も有之候節は全天災斗と難申、夫是種々心配仕候、盆後ニ相成候得は荷物出方之義は相増可申哉ニ奉存候、何れニいたせ、切仕建之義は於当地不弁理之筋有之候ニ付、右御仕法解放、向後菱垣・樽之無差別、船々登込次第直様致船付、相成丈足輕之積方ニ而早出帆可仕候

様、宜敷御配慮可被下候様奉願上候、先は右之段得御意度如此御座候、恐々謹言

卯七月廿四日

江戸九店

世話番

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

<史料6>

慶応3年8月18日付

大坂九店世話番より江戸九店世話番宛書状控

貴地先月廿四日出御状着、難有拝見仕候、如来命之秋暑退兼候所、先以各様益御壮栄之段奉珍賀候、然は当春来兎角荷少ニ而、船々仕立方隙取甚不便利ニ付、一同種々評儀之上、無余儀当六月より菱・樽三艘宛切仕立ニ而、荷少中見送り之仮法を以差配仕居候段御承知ニ相成、右仮法不都合ニ思召候廉も有之候間、早々解放菱・樽無差別登リ順之船付為致、順仕立ニ相成候様取計可申旨御細書之段承知仕、仰迄も無御座左様仕度義ニ候へ共、右先後順仕立之廉少々落合兼候意味も有之、殊に当節ニ至盆前より却て荷少相成、一向仕立不捗取、旁此処ニて登船一艘之船付ニ相成候ては、尚更出荷物斑ニ相成、此上不便利勝ニ可有御座と前後心配仕、船手相招種々評儀之上、当時菱方船数多き廉を以、菱四艘・樽三艘、都合七艘宛之船付ニて荷少中為見送、其中諸荷物出方相増次第解放し可申方、江坂共便利筋ニ候半と相心得候間、可相成ハ何卒暫時御同意願敷奉存候、乍併貴地御一同思召御相違之御儀も御座候ハ、如何様共可仕候間、最一応御評儀之上、兎も角否哉御再報被仰付度、此段奉願待上候、先ハ右御請旁御伺談申上度如是御座候、恐惶謹言

卯八月十八日

大坂九店

世話番

江戸九店

御世話番衆中様

参ル人々御中

<史料7>

慶応3年9月2日付

江戸九店世話番より大坂九店世話番宛書状

以連札啓上仕候、秋冷相増候所、先以其御地各様倍



御平安被成御座、珍重之御義奉賀候

一先月十八日出之御連状相違、忝拝見仕候

一船々仕建方春來荷少ニて隙取候ニ付、御一同御評儀之上、当六月より菱垣・樽三艘宛切仕建之仮法御取極ニ相成候段、無余義次第ニ推承仕候得共、当時菱垣・樽方船数之多少も有之、然ニ双方共三艘ツノ切仕建ニては、船数多方は同日ニ登込候ても跡廻シに相成、先船仕建中空敷致滞船、諸色高直之折柄諸難用相嵩、船手難波は勿論、且は船頭并乗組之丹精・不丹精ニも不拘、其時々之廻り合ニていや応なく、是非共順番ニ仕建方仕候事故、跡船之つめ掛待居候ニは頓着無之、銘々相成丈運賃高之相登候義專一ニいたし、自然過積にも可相成哉、左候ては海上之義も実以心配之次第、此上荷物之撰嫌仕候様成行候ては不都合ニ付、切仕建解放、菱垣・樽之無差別登込順ニて直様致船付、船手之丹精次第ニて早出帆仕候様被成下候ては如何可有之哉ニ先般御尋談申上候所、早速ニ御評議被成下、兼て右様ニも御取計被下度思召ニは候得共、前後順仕建之廉落合兼候御意味合も有之、殊ニ当節ニ至盆前より却て荷無少ニ相成、仕建方不取撈、登船惣体之船付ニ相成候ては御不弁がちに思召、船手御招御評儀之上、当時菱垣方船数多廉ヲ以、菱垣四艘・樽方三艘、都合七艘之船付ニ御取極被下候得共、存知寄も有之候は可申上之旨被仰聞、荷無少中之事故数艘一時之船付ニ相成候ては、船々え諸荷物散ら張、却て出帆手をくれニ可相成、依之差向候所七艘宛之切仕建之義は御尤ニ承知仕候、併当時菱垣・樽と二派ニ立別、既ニ双方より船付仕候様成行候得共、元々菱垣建ニて両地九店差配船之事故、別派ニ可相成筋も無之、両組廻船致合夥、相互ニ隔意無之、此上ともニ和熟いたし、一致之心意ニて助合候やう仕度奉存候、左候得は菱垣四艘・樽三艘ツノ双方より船付仕候義解放シ、菱垣・樽之差別なく惣躰菱垣建之事故打込ニいたし、登順ニて七艘宛船付仕、壹艘出帆仕候は跡壹艘船付仕候様順操ニ御取計被成下候は、菱垣・樽船付之多少之論も無之、自然と平等ニ可相成、思召如何御差支之有無御尋談申上候、否被仰聞可被下候、先は右御請申上度如此御座候、恐々謹言

卯九月二日

江戸九店

世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

# <史料 8>

明治 3 年 4 月 13 日

東京九店世話番より大阪九店世話番宛書状

一筆啓上仕候、薄暑之節御座候得共、各様倍御平安被為渡奉恭賀候

一差配船之義、近來荷無数ニて仕建方尺取不申、依之船々登込以順番、是迄切仕建ニ御取極被成下、順操仕建ニ相成、順番ニ相当候船々は船頭之丹情・不丹情ニも不拘順番を以積請候ニ付、右格合ニ泥ミ順番船付ニ相成候故死物ニ罷成、船手之者自然等閑勝ニ成行、不心得之船頭は前条荷不足之折柄も無頓着、自分勝手を以荷物之善悪撰嫌いたし、四十日或は五、六十日も永船付ニ相成、其跡え登込候船々は空敷永々滞船いたし、相互ニ渡世ニも難相成、荷物延着不弁利之至ニ付、追々菱垣衰微之非相頭れ、他船積増<sup>(加力)</sup>過致候様成行、船主は申迄も無之、其筋拘候者多人數難波之趣ニ付、今般仕建方仕法相改度、左ニ御相談申上候

一船付当日より十日目限積切出帆早上下之事

但シ海上乗廻シ宜敷様專一ニいたし、譬は式千石積之船ならハ、千五、六百石より以上之積方不致、其時々荷寄之模様ニて、半艘荷たり共今般取極候十日限ニて出帆早上下致、専務可申候事

一船付十日限ニて、荷寄之多少ニ不拘船付引可申事

但荷主方より積出シ、右日限より延々ニ相成候は、仮令運賃宜敷荷物ニても不待請、十日目限急度出帆致可申事

一船々之手都合又は荷主之見込を以、米塩之類其外之品なり共下タ荷物買積いたし、菱垣荷物差荷ニ積入、五、六日目ニ出帆相成候義は船手仕建方出情いたし候事柄ニ付、勝手次第之事

一船々仕建ニ付ては兵庫・神戸出荷物ニても積合候義は勝手次第、情々荷物積入ニて出帆日限同断之事

但シ手板外之品は海難之節取用不申候事

一船々登込荷物出方之多少を相考船付可致、自然先船数艘之節一時ニ船付致候て、船毎端積ニ相成候ては却て不都合ニも可有之歟、船頭十日限ニて仕建方出来候以見込船付ニ可致候事、右廉之義は近來菱垣方永仕建ニ相成、諸方共御氣請不宜、当時之姿ニて押移候は此上之衰微ニも可相成哉ニ当地両家問屋より毎々相敷、無余義次第ニ御座候間打寄相談仕候所、前条十日限之義至極之弁利と早速一同決評ニも相成候ニ付、当時居合之船頭相招申聞候所、方今之折柄旧格ニ而已相泥、近頃之振合にて年々壹兩度之上下

ニては迎も難立行、何様ニも致丹情急度仕法可相守  
趣ニ御座候、併なから御地御各意之程難計候得とも  
不取敢前条之次第申上候、何卒兩地合躰之以思召御  
加談被成下、御配慮之程奉願上候、先は右之段為可  
得御意如此御座候、恐々謹言

午四月十三日

東京九店

世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

猶々本文廉書之義は、寄合之席ニて相認候まゝ申上  
候間、不弁之義も有之候ハ、乍御筆勞御加除被成下、  
聊無御服蔵被仰聞可被下候様御願申上候、已上

<史料9>

明治3年11月5日付

東京九店世話番より大阪九店世話番宛書状

一筆啓上仕候、向寒之節ニ御座候処、貴地各様倍御  
平安被為渡恭賀不斜奉存候

一近來菱垣差配船荷無数ニて仕建方不取拂、御同前不  
弁利ニ成行候ニ付、追々蒸氣積一般之気配ニ相成菱  
垣衰微ニ至、当地兩家廻船問屋相続方無覺束趣兼々  
相歎罷在候所、今般蒸氣船取立、是迄之菱垣荷物運  
送仕度段被申出、至極之弁利ニ付、御公込え御願濟  
ニ相成候ハ、積方可致候条示談いたし置候所、先達  
て兩家廻船問屋より東京府御役所え申立、蒸氣船ニ  
て運送方奉伺上候所、兼て之御布告通之義ニ付速ニ  
御聞濟ニ相成、依之此度不取敢蒸氣船相備左ニ

一鐘山丸

一紅葉賀丸

一夕顔丸

一戊辰丸

右之通差向四艘差立、其余は是迄之菱垣船兼交いた  
し、蒸氣船兩様ニて運送仕度段被申出、衆評仕候所  
至極之弁利と一同承知致遣シ申候、尤万一差支有之  
候節は増船可仕候対談取極置候ニ付、此段宜敷御承  
引被成下、是迄通兩家差配船え精々御積方可被成下  
候様奉願上候、先は右之段得御意度如此御座候、恐  
々謹言

午霜月五日

東京

九店世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

猶々此度荷物積方并船手用兩様相兼左ニ

利倉屋金三郎

代 十兵衛

仙吉

錢屋卯兵衛

代 貞七

四郎右衛門

右四人蒸氣乗船貴地え参上仕候間、委細之義は御面  
談之上御聞取被遊可被下候、以上

<史料10>

明治3年12月6日付

東京九店世話番より大阪九店世話番宛書状

以連札啓上仕候、嚴寒之節ニ御座候所、貴地各様倍  
御平安被成御座、珍重之御義奉恐賀候、然は今般左  
ニ

一妊婦丸

錢屋卯兵衛殿手船

日野屋利右衛門殿

小堀屋新兵衛殿

但シ右兩家付

右蒸氣船御公込え御願濟相成免状ヲ請候ニ付、積付  
いたし呉候様被申出候ニ付、九店一同乗船見分仕候  
所、無双大丈夫抜群之船ニ御座候得は、格別之御引  
立ヲ以御精々荷物御積方被成下度奉願上候、先は右  
船手添状如斯御座候、恐々謹言

午十二月六日

東京

九店世話番印

大坂九店

御世話番衆中様

参人々御中

後 記

本史料の閲覧にあたって村田修三氏・牧田りゑ子氏  
に種々御配慮いただき、また史料整理に際し石井謙治  
氏の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。